

日常性の重き深部に立ち、 軽やかな日常性に反逆せよ！

全学園争連合 結成の 呼びかけ 旧西洋史争

国家権力と当局の強权的な弾圧を不屈の決意を持って、はねかえし、筑波移転糊塗まで、断乎として永続的に闘う覚悟を固めている諸君！ 我々西洋史争委員は、今後の斗争の方向性として、それに踏まえたい決意と連帯を求めたい。

●一つの想像的仮定

具体的な状況の中での自己を問題とし、これを凝視することによって自己を投げ捨てるべき深淵を掘り当てること。68・69年の学園斗争が獲得した学生運動における新しい質であるとするのなら、我々は我々自身を問題とする所なら出発して居る斗争を展開していなければならない。

●一つの現実

しなるに、教育大斗争は、その250日間のバリケード街頭と3月尊厳斗争の中で現象したものは、「観念としての斗争である筑波斗争と、現象としての弾圧への戦術的斗争をこなした。我々が必要としたものは、観念から具体への転化である。これは具体的な斗争の場の設定と必要とする。闘争組織そのものを問題とする中なら、現象としてのラディカルさを現実せしめる部隊を必要とせず、思想（その為には死せる思想）としてのラディカルさなら断乎とした奥出実行部隊の創出にあった。

●現実の現実

しなれ、教育大のバリケードはそのチャ・チに家徴される如く、その奥はカエルとナメコジとハビの相互依存の中を弱々しくハビがデバ、テリたようなものであった。そのハビとは、結局、希薄なガス状のモヤであった。我々はバリケードという真空創出装置をめぐり歩いたなら、その中で新しい「根に反逆する人間」を造り出すことなく放棄されてしま、たのだ。そして3月尊厳斗争は250日間のハネッカイとリとしてあり、戦術的ラディカリズムの3週間の後、斗争の質として何らの転換も高次元化もなれず、ジリ貧状態に陥り、てしまった。

●想像的仮定は現実を告発する

具体的な日常の中なら問題を掘り当て、自己の奥を踏まねばならぬ深淵を啓示と感動によって掘り出さなければ、我々は最も重く、高き飛翔を自分のものとする。しなれ、筑波斗争は「観念の斗争」として我々の外に在り続けたことにより、我々は、我々自身、学生としての我々自身の存在を何う問題することなく斗争しえた。単位取得は可能であろう、卒業試験は大丈夫であろう、その内終るであろうという疑問に「あろう」続きでぐらぐらと継続した我々の斗争は、従って我々は、6・10・6・20決定の白紙撤回されたことすらくそのことは筑波問題が、日本資本主義の科学技術政策、教育政策の中で、世帯不可決するものとしてある以上、ありえないことである。しなれ何れかの強力で取相話し合い路線の結末として「勝利」に斗争として終った場面にすらなりと授業へ復帰するという斗争として終始した。筑波研究学園都市創設と我々の日本の教育体制再編の、の重要な環を問題とし得ても、自己を具体的にやんゆりと奥淵の如く掘りこんでいた現行大学制度そのものに我々の否定の锋芒は向けられず、従って我々は自らを告発することなく権利として斗争していたという茶番、この輩は頭と心臓の内にたたまこんでおくべきである。

